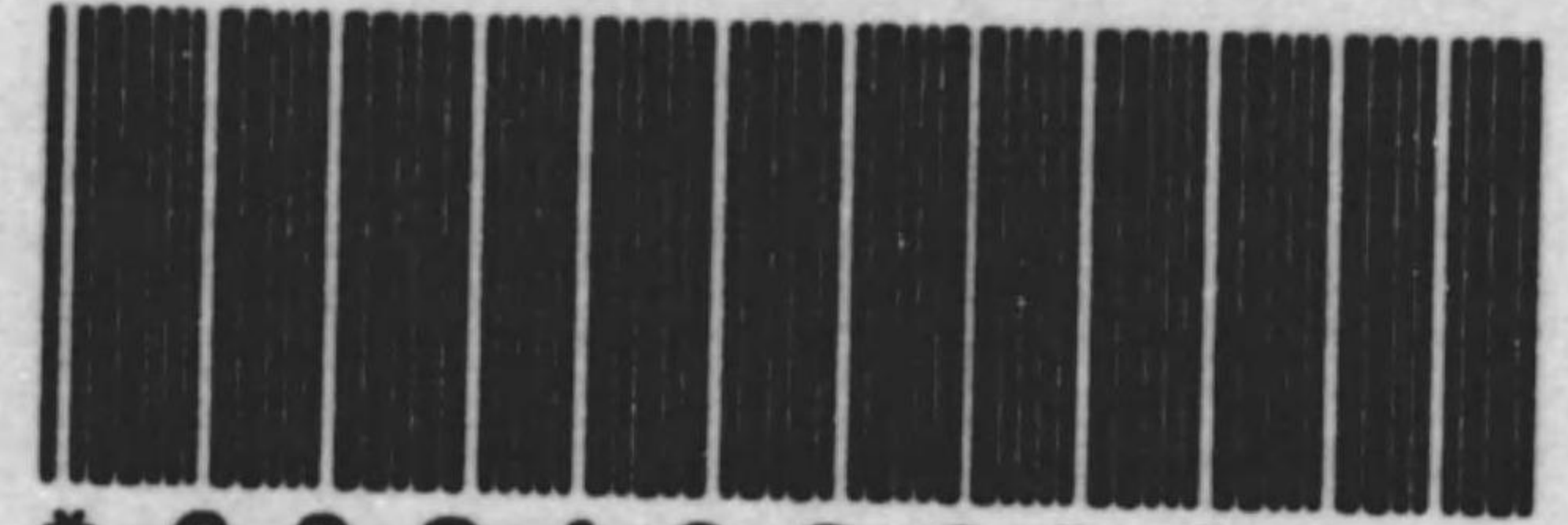


特501

583

マルクス・レーニン主義手引

国立国会図書館



* 0034986000 *

0034986-000

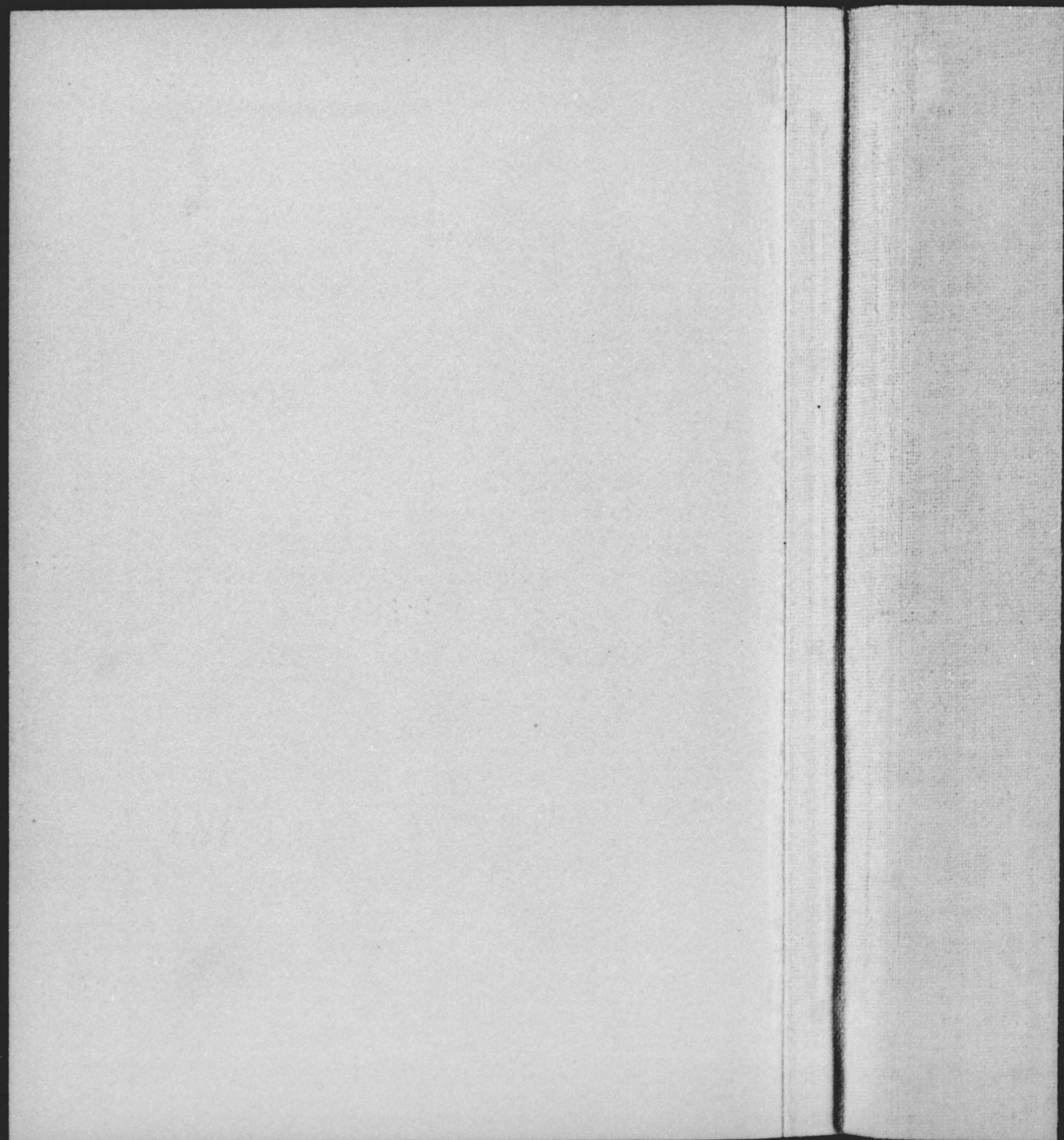
特501-583

マルクス・レーニン主義手引

日本プロレタリア文化連盟

昭和8. 4

AGC



6.26 警視座(警察) 地方検察庁

三

5-118

ニ
ン
主義

マルクス・レー

安
寧
禁
止



省
8.6.26
列第2035



全紙
三
四
自
止
空
然

文化 公衆文庫

西
號 855
永久保

特501
583

コップ拾録文庫第二輯

マルクス・レーニン主義手引

★ 目 次

緒 言……………三

マルクス主義研究入門……………七

一、マルクス主義はプロレタリアの世界観である……………七

二、全體としてのマルクス主義とその諸部分……………二

三、哲學的マルクス主義辯證法的唯物論……………七

四、經濟學的マルクス主義……………三

五、政治的マルクス主義……………三

六、終りに臨んで……………九

レーニン主義とは何か……………三

一、スターリンの定義……………三

二、レーニンの帝國主義論……………五

三、プロレタリアートの獨裁……………六

四、革命のレーニンの戰略・戰術……………六

五、黨についてのレーニンの理論……………〇



79W10045

緒 言

一九三三年三月十四日は世界のプロレタリアにとつて忘れることの出来ないカール・マルクスの五十年記念日である。

マルクスの偉大な革命的理論と実践とは、レーニンによつて發展され、スターリンによつて正しくうけつがれ、今日ほど世界のプロレタリアート解放の必須な武器とされてゐることはない。

屈辱的な抑壓と搾取に對して様々の形で本能的に闘つてゐる大衆がマルクス主義、その發展としてのレーニン主義を我ものとしたときこそ、初めてすべての反抗、闘ひが「理性的な確固不拔のものとなり正しいプロレタリア革命の道によつて敵を撃破し、勝利し得るものとなるのだ。

このマルクス・レーニン主義手引の第一部「マルクス主義研究入門」は簡単にマルクス主義の要點を説明してゐると同時に、マルクス主義についての讀書の手引ともなつてゐる。

第二部「レーニン主義とは何か」は我々の時代、マルクス主義としてのレーニン主義の本質を示し、レーニン主義がいかにプロレタリアートの闘争のための現実の指針であるかを示してあるものである。

四

マルクス主義研究入門

一、マルクス主義はプロレタリアの世界観である

ソヴェート同盟をのぞく世界の資本主義國は、今や未曾有の經濟恐慌とともに、あらゆるブルジョア的世界觀の總體的破産の時代に直面してゐる。

資本主義經濟が恐慌を解決し得ず、却つて實際にはそれを深める役にしか立たないと同様に、ブルジョア哲學も、法律、道徳も、科學も、今では根底からグラつき、窮乏化する社會で苦しみ闘ふ大衆の力となり、現在と未來とに歴史的な正しい見透しを與へることなどは思ひもつかない状態に陥つてゐる。

ブルジョア思想家は段々後ずさりして坊主と同じところまで引込んだ。そして、今は崩壞の迫つた資本主義社會の雇ひ人夫となつて、古びた排外主義だの運命論だの、戦争煽動論だの、日夜壊れる資本主義の社會へ突張りをかふために奔走して居る。

自身の解放のために立ち上る大衆に向つて、彼等はしつこく、厚かましく諦めの理論

屈伏の説法を押しつけようとしてゐるのである。

このやうな時代において……、ガツチリと組み立てられ、科學的基礎を有する世界観——現在を把握させ、將來を認識させるやうな、世界観の存在するとは非常に大きな重要性をもつものである。マルクス主義こそ、かうした世界観であるこのことは、全世界のブルジョア政治家、御用學者、ダラ幹等がマルクス主義を「赤い思想」として目の敵にしてゐることからも、またソヴェート同盟におけるプロレタリア革命による最初の、世界史の上に新しい一つの時期を劃した資本主義戦線の突破といふことが、たゞマルクス主義の赤旗の下においてのみ成功をおさめたといふ事實からも、同様に證據立てられるのである。

だが、不倶戴天の仇敵同士として公然と對立してゐる反動的な國粹主義、排外主義等と革命的マルクス主義との中間には、なほ改良主義的な似而非マルクス主義が割り込んで来る、即ち——マルクスの味方面をしてマルクス主義に對する陰險な攻撃をやつてゐるのだ。そこで、今更いふ迄もなく、本物とにせ物、眞理と欺瞞とを確實に區別するとの出來るためには、マルクス主義の核心をシツカリ掴んでゐなければならぬ。マル

クス主義の眞面目な研究といふことが飽くまで大切である。

だが先づ第一に、恰もマルクス主義といふものが、學問的な、文字面だけの研究で完全に獲得され得るかのやうな、謬つた考へ方を、克服しなければならぬ。マルクス主義は、たゞマルクスやエンゲルスや彼等の最大の弟子であるレーニンの著作の中に盛り込まれてゐるばかりではなく、それは階級意識あるプロレタリアートの運動の中に血となり肉となつて具體化されてゐるのである。マルクス主義は理論であると同時に實踐であるのだ。「革命的理論なくしては革命的運動もあり得ない」といふ有名なレーニンの言葉は、革命的運動なくして革命的理論なし！といふ風にも讀むことが出来る。そしてその意味は、一人々々について言ふならば、君はマルクス主義を學問的研究や、書物や、學校風の習得だけによつては到底ものにするには出來ない。君はマルクス主義的運動の實踐の中に兩足でもつて飛び込まなければならぬ、といふことなのである。マルクス主義的學說の眞價が分るためには、プロレタリア大衆運動の強い波が君を捲込んで進むのでなければならぬ、また社會的、政治的、經濟的闘争の實踐に、君が自分から積極的に参加するのでなければならぬ。

「實踐に於いて人間は眞理を、すなはち彼の思惟の現實性と力、その此岸性を證明せねばならぬ。」(マルクス・フオイエルバッツハ論綱の第二)

これが、マルクス主義研究にとつての、革命的活動および實踐的批判的活動の意義である。職場農村における實際の革命的大衆運動から毎日の生活が浮きはなれてゐるといふことこそが、インテリの小市民的傍觀者がどんなに眞面目にマルクス主義を研究してゐるつもりでも、結局眞のマルクス主義者にはなれない理由である。彼は單にマルクス主義者氣取りの個人主義者にしか過ぎない。ところで實に、共產主義者にあつて初めてマルクス主義的知識と活動との根本的統一は現はれるのであり、従つて共產主義者においてのみマルクス主義は眞に生けるものとなることが出来るのである。

我々が一應こつといふ根本的な統一について、はつきりした知識をもつた上でならば、我々がこゝで暫くマルクス主義獲得について一面だけの取扱ひに限るとしても、それによつて何等の障害も起らないであらう。といふのは、我々はこれからマルクス主義研究の一方面、即ち、マルクス・エンゲルス、およびレーニンの著作の注意深い勉強によつて得られる方面だけを、觀察しようとするからである。勿論こゝでも主眼點はマルクス

主義による行動への示唆を興へるといふこと階級的實踐への準備的な手引きをするといふことである。

二、全體としてのマルクス主義とその諸部分

マルクス主義とは何か？ といふ根本問題を論ずるに當つて、我々は先づある種の誤つた答へを拒否しなければならぬ。似而非マルクス主義それは——第一に改良主義である——は、最も善い場合に於いてさへも、單にマルクス主義の個々の命題だけを全體から切りはなして、承認しようとするが爲に、マルクス主義そのものを一つの部分的なもの、一つの科學的部門と見做す結果となる。似而非マルクス主義にとつては、マルクス主義といふものは、何かたゞの研究方法とか、又は一つの特殊科學(多分經濟學、又ははいくらか廣く解釋されて、社會學)とかに過ぎないものであるかのやうに考へられてゐるのである。だが老ベールでさへ、既にその當時、眞の事態をもつと正しく見てゐたし、それを次のやうな言葉に現はしてもゐる、——

「社會主義とは明確な意識と完全な認識とを以つて人間的活動のあらゆる領域に應用

された科学である。」

ベーベルがこゝで社会主義と呼んでゐるのは、科学的社會主義又は共產主義としてマルクス主義以外の何物でもない。マルクス主義は任意の個別的科學でないばかりか、むしろ普遍的科學、通俗的にいへば、世界観である。蓋しマルクス主義は、決して、神や靈を引っぱり出す神秘的根源や超世界的觀念にもとづく空想的思辯でもなければ、穿鑿三昧でもなくて、反對に辯證法的唯物論の科學的世界観であつて、それによつて人間が彼の周圍の現象界の本質および發展の合則性を科學的に明かにしようとするところのものであるのだ。

我々の生活に起る様々の事實、失業、戦争、農村の飢餓といふ事實やその事實が複雑にからみあつて生じる複合體が次のやうな觀點、即ち——

第一には唯物論的（といふのは、物の見かたが自然的制約や本質の理解の上に立つてゐること、従つて坊主くさい超自然的信仰筒條や彼岸的（あの世的）前提を伴はない）第二には辯證法的（といふのは、物の見かたが革命的、飛躍的發展過程として行はれるといふこと、従つて硬直せる永劫不變的眞理のミイラではないこと）。

第三にはプロレタリア的・共產主義的（といふのは、プロレタリア解放闘争のためにどのやうな、効果をもつかといふこととどのやうな價值があるかといふ評價が必ず行はれるといふこと）。

社會の事實がすべてこれらの觀點から觀察される場合に、それを「マルクス主義的」に觀察されたものと云ふことが出来る。だがなほその上に我々が既に見たとほり、たゞ「觀察する」に止まらず、また「理解する」だけでなしに、行動的に着手し關係するところが必要となつて来る。マルクス主義は單に世界観であるばかりでなく、むしろ世界變革である、——

「哲學者らはたゞ世界をいろいろに解釋して來たばかりだが、肝要なのはそれを變革することにある。」（マルクス『フオイエルバツハ論』綱の第十一）

マルクスの仕事において、世界變革が強調されてゐるといふことからして既にマルクス主義の重點が自然の研究の中ではなく、むしろ社會の研究の中にあるといふことが明らかである。

マルクスは、従來の歴史家たちが、社會の歴史は一人の英雄の出現によつて變へられ

るとか、偉大な哲學的思想によつて進められるとか、とりとめない（觀念論的）なことを云つて居たのに對し、ハツキリと、人間社會の發達は生産力と交易關係の發展の結果によるものであることを證明した。

「從來のすべての社會の歴史は、階級闘争の歴史であることを立證したのである」
 「ブルジョアジーは、僅か百年ほどの、その階級的支配において、過去の一切の諸時代を合したよりも多量な、より巨大な生産力をつくり出した。」と、マルクスは階級としてのプロレタリアの發生について解り易く「共産黨宣言」の中で説明してゐる。

ブルジョアジーはその巨大な生産力を武器として、封建制度を倒したのだが、その武器は外ならぬブルジョアジー自身に向けられるようになった。

「ブルジョアジーは、自分に死をもたらす武器を鍛へ上げたばかりでなく、その武器をとるべき人をも作り出した——即ち近代の勞働者、プロレタリアを。」（共産黨宣言）
 プロレタリアートとブルジョアジーとはその發生の最初から和解することの出来ない對立である。

資本主義生産が發達すればするほど大生産が發達し、大生産に勞力を賣つてかつ

生きるプロレタリアートが増大し、職場における日常的な協力から革命的結合を學ぶ同時に小數者による資本集注の壓力によつて下層中産階級、小工業者、小商人、小地主農民等、支配階級の多大な構成部分が續々とプロレタリアートの中に投げ込まれる、産業の進歩とともに、却つて生活條件を低下されるばかりである。

「從來政權を握つた總ての階級は、全社會を自己の収益條件に屈從させることによつて自己の、既得の生活地位を確保しようとした。プロレタリアは、從來の自己の所得方法、従つて從來の全般の所得方法を廢除することによつてのみ、社會的生產力を獲得することが出来る。」斯くてマルクスは、初めて資本主義社會における革命的階級としてのプロレタリアートの位置と社會主義社會の創設者としての歴史的な役割を明らかにしたブルジョアジーを恐怖と憎惡によつて震ひ上らせ、勤勞大衆を新たな希望で奮ひ立たせるところの社會發展の原理、ブルジョアジーの「没落とプロレタリアートの勝利とは同様に不可避である」といふ歴史の合則性を、マルクスこそがあげて大衆に示したのである。

我々にとつては唯物史觀がマルクス主義的世界觀の最も重要な部分となるのである。

マルクス主義研究のためには、マルクス主義の中で一定の主要分野を分つことはどうしても必要である。レーニンはその非常に有益な論文「マルクス主義の三つの源泉と三つの構成部分」(一九一三年)の中で、本来の意味での哲学、経済学、および社会主義をもつて、その三つの構成部分としてゐる。我々はその区分に倣つて——マルクス主義を哲學的、經濟學的、および政治的のものに区分したいと思ふ。たゞその際忘れてならないことは、これら三つの分野は同等の資格で並存してゐるものではない、といふことである。哲學的マルクス主義は、いふまでもなく、既にマルクス主義の全體を表はしてゐるのだ。哲學的マルクス主義の原理からして、先づ第一に、すべての社會的現象における經濟的基礎の發見といふ特別の重要な結論が生れる。そこでマルクスの科學的主要勞作は特殊な經濟學的探究に及んでゐる(マルクス、資本論)さういふ意味で、經濟學的マルクス主義を、特殊な主要部分として取上げることが正しい。とはいへ、マルクスにとつては經濟學的批判は、目的のための手段であるに過ぎない。この目的——プロレタリアートの解放といふこと——は、だが、明かに政治的課題である。そこで我々は政治的マルクス主義を第三の部分とする。政治的マルクス主義の根本學説は、勿論、直接

にマルクス主義的世界觀および歴史觀から生ずるのである。史的唯物論にあつてはいふまでもなく、階級や、階級國家や、階級闘争の存在といふことが、すべての探究の中心點をなしてゐる。それ故、政治的マルクス主義の研究も亦、直ちに第一の部分(哲學的マルクス主義)の根本的研究に結び付けられるのである。

マルクス主義の内容全體に關する優れた概觀を、我々は、レーニンが一九一四年にロシア百科辭典のために書いた「カール・マルクス」といふ論文の中に見出す(現在はレーニン小文庫の第一巻に收められてゐる(一九三一年))、またエンゲルスの比較的大部な論争書たる「オイゲン・デューリング氏の科學の變革」も亦、そこでは勿論デューリングの種々の誤謬の批正にぜひ必要であつたやうな諸部分が特に前面に押し出されてはゐるが、やはりマルクス主義の學説構成の全體的輪廓を與へるものである。

三、哲學的マルクス主義、辯證法的唯物論

★ レーニン著「カール・マルクス」(レーニン小文庫。第一巻、一九三一年、五六一六三頁)の附録として收録されてゐる

我々がマルクス主義の世界観をよく識らうと思ふならば、先づ第一に觀念論と唯物論との對立について辨へねばならない。それは、あらゆる超自然的な、世界についての表象と、自然的な世界観との對立に他ならない。マルクスは嘗て「確かに彼自身の考への發展をも考慮に入れて」言つたことがある、——宗教に對する批判はあらゆる批判の前提である、と。(一八四四年)「史的唯物論について、第一部」エンゲルスの精神的發展の歩みも亦、彼の青年時代の手紙によつて説明されるところでは、間斷ない、部分的には苛酷すぎる程の自己批判の中で、宗教的に育てられた一人の青年がどんな風に無神論的唯物論者に變つて行つたかをハツキリ示してゐる。彼のかうした生長過程のために決定的な刺戟を與へた男のために、エンゲルスは、彼の小著「ルードヴィツヒ・フォイエールバツハと古典哲學の終結」(一八八六年)の中で、不滅の記念碑を建て、やつてゐる。本書およびエンゲルスの「反デューリング」(エンゲルスの「空想から科學への社會主義的發展」は、本書の最も重要な諸章からの抜萃である!)の中に、我々は、マルクス主義の世界観の最も詳細な叙述を見出す。自然科學的面からの根本的な補充を齎らしたのは、エンゲルスの遺稿のうち大きな斷片たる「辯證法と自然」(マルクス・エンゲルス・

アルヒーフ第二卷を見よ、一九二七年)の發表である。宗教に對するマルクス主義の態度は、餘蘊なく且つ通俗的に、レーニンの小冊子「宗教について」の中で明かにされてゐる。(レーニン小文庫、第四卷)

マルクス・エンゲルスの唯物論は、——マックス・アードラーやその他の連中が信じたがつてゐるやうに——何等の形而上學的な、頭の中で捻り出されたもの(幻想)ではない、そこにはこの世界をなしてゐるものの隠れたる性、といふやうなことに關して如何なる思辨もなければ、如何なる空想的な證言もなされてはゐない。われ／＼が其を理解するとしなにかはらず、好くと好かないに拘らず我々から獨立して存在する客觀的現實としての世界の事實、それがマルクス・エンゲルスの「唯物論的」觀察の簡單明瞭な出發點である。そこでレーニンもこの關係を彼の大きな論争書「唯物論と經驗批判論」(一九〇九年)の中で、次のやうな命題で特徴付けてゐる、即ち——「自然の客觀的合則性の承認、および人間の頭腦における此の合則性の可及的に正しい反映の承認、これが唯物論である」と。世界の事實の、別して所謂生物の發展において、我々は精神的諸現象にも順位の現はれることを知る、例へば、腦の發達が生物學におくれてゐるア

フリカの土人と、最も発達した脳の構造をもつてゐたレーニンとを比べれば、兩者の精神活動の現れは、その複雑さ明析さにおいてまるで違ふことを我々は認めずには居られない、そこで——物質的存在が一切の精神的なものを規定するのである。

マルクス主義は何等の認識批判的立場をもたない、それにはドイツ哲學者で、今日でもブルジョア哲學者共の總元締めをなすカントの見地——それによれば、此世で人間がもち得るあらゆる認識は限られた一人一人の主觀的認識たるに過ぎない、といふ——が明かとなつてゐない、といふやうな主張（アードラーその他の）に對しては、他ならぬエンゲルスの、マルクスのフオイエルバツハ論綱（*）に關聯して書かれたものを讀めば、次のことが十分證明されてゐることがわかる、即ち——マルクスやエンゲルスは人間の個々の經驗が相對的なものであるといふことについては充分明かに知悉してゐたといふこと、然し不確な主觀のあらゆる誤つた判斷が、漸増的に、人間の實踐によつていひかへれば、社會的發展そのものによつて、訂正されるものだ、といふことを承認してゐるといふことが分る。昔の人間は科學が未發達のために、電氣の力を正しく理解出來ず、それを魔物だと思つてゐた。しかし今日では小學生がその電力を支配してラジ

オを作つてゐる。）電氣といふものに對する認識は明らかに社會的發展そのものによつて革命された。

マルクス・エンゲルスの唯物論は、それ故、辯證法によつてその特別な、決定的な特色をもつのである。何となれば、それは一切の存在の（自然、歴史、および思惟に於ける）間斷なき革命的な發展についての學說であるから。この點に關しては、とりわけ、エンゲルスの「空想から科學へ」の第二章を讀むべきである。重要なのは、マルクス主義の發展についての概念は、たゞ同形的、繼續的な變化をあらはすばかりでなく、むしろ、飛躍的に現はれて來る發展の諸契機の中に、發展の決定的な轉換點を擱んでゐる、といふことである。それ故に、諸々の革命は進化の個々の部分である。

當然のこととして、マルクスとエンゲルスとは、最も屢々、彼等の世界觀の最も重要な部分たる彼等の革命的歴史觀について語つてゐる。マルクス・エンゲルスの「史的唯物論について」第一卷及び第二卷の中に、すべての彼等の著作のうちの最も重要な箇所が、その他七篇の、史的唯物論の根本思想を述べてゐる彼等の可なり大きな論文と一緒に、集められてゐる。その中で壓倒的な意義をもつてゐるのは、マルクスとエンゲルス

とによつて一八四五—四六年に共同で執筆された、ドイツチエ・イデオロギーの第一部（唯物論的見方と観念論的見方との対立）である。この本の第二部で、讀者の興味をひき付けるのは、第一にエンゲルスの史的唯物論に関する書簡（一八七〇—七四年）であらうし、とりわけ、有名であり乍ら屢々充分によく讀まれてはゐないところの、マルクスの、**經濟學批判のための序説**（一八五九年）であらう。

（以下）マルクスの書いた此の極めて重要な十一の短章は、エンゲルスの「フオイエルバッハ論」の中、およびマルクス・エンゲルスの「史的唯物論について」第一巻の中に含まれてゐる。

四、經濟學的マルクス主義

經濟學的マルクス主義は、マルクスの偉大なる經濟學的著書「資本論」および「剩餘價值學說史」の中に、體系的な構成をもつて示されてゐる。然し乍ら讀者は、最初に先づマルクスのより小さな一つの著作である「賃労働と資本」及び「賃賃、價格、および利潤」によつて、マルクス主義の經濟學的原理を學び取る方が、好都合であらう。その

場合の補助となるものとして、ヘルマン・ドウンカー（本文の筆者——譯者註）の「カール・マルクスの經濟學的原理の研究指針」（第二版、一九三一年）がある。それに次いで、同書の附録として収録されてゐる「資本論」第一巻に對するエンゲルス執筆の、第二、第三巻に對するローザ・ルクセンブルグ執筆の解説からして、讀者は、マルクスの主著についての一應の優れた概念を得ることが出来るであらう、マルクス自身は嘗つて餘り學問的素養のない一人の友人に向つて「資本論」第一巻では、最初に第八、第十一、第十二、第十三、および第二十四章を讀むやうにと奨めてゐる。だが、それにしても、この大著全體をその雄大なる構成のまゝで受け入れるといふこと、そして確かに容易に入り難い第一篇（「商品と貨幣」）の門をぜひとも潜るやうに努力するといふことは、斷じて放棄さるべきでない。

マルクスの經濟學的探究のすべては、今日もなほ資本主義のあらゆる根本的批判の出発点とならなければならぬところの、次の二つの點をめぐつて行はれてゐる、即ち

- 1、如何なるところに資本主義的搾取は存在するか？
- 2、資本主義發展の道とは如何なるものか？

資本家を儲けさせ、資本を蓄積させるところの剩餘價值は只労働力の搾取によつてのみ可能であるといふ秘密の曝露はそれによつて社会主義が一個の科學となつたところの一つの偉大な行爲だと、エンゲルスは云つてゐる。搾取の正體は極めて巧妙な仕方である。資本主義の生産機構は、幾百萬、更に幾百萬のプロレタリアを燃料として運轉されてゐるといふこと。多くのプロレタリアは自ら既に燃えさかる爐の中に投げ込まれてゐながら、まだ十分この事を見極めようとしてゐない。かうした資本主義的搾取の正體を包み隠すことが、他でもなく改良主義の主要任務である。(これに關しては、リンドン・社会民主黨の「賃銀理論と賃銀政策」一九三一年、を見よ)この社会民主主義的労働組合的賃銀理論は、薄弱であると共に有害な反マルクスの混合物である。

資本主義に對するマルクス主義の第二の主要攻撃點は、資本主義的生產方法の無計劃的な進展に關聯してゐる。資本主義の生産機構が、經濟的に益々立ち遅れて來、非生産的となつて來、(現在不景氣で生産機械の半分は運轉中止されてゐる)社會にとつては一層破壊的となつて來てゐるといふ事實、これが資本の蓄積に關するマルクスの理論であつて

その中には、窮乏化の理論も崩壊の理論も共に含まれてゐる。今日マルクス主義を實現してゐるソヴェート同盟以外の資本主義國は末だ曾つてなかつた程の恐るべき恐慌に襲はれてゐる。四千萬人の失業者と労働強化と婦人幼年労働の搾取が非文明的に行はれてゐる現在、あらゆる勤勞者にとつてマルクスの資本主義の正體パクロは全く殊更に興味深い、一つの科學的探究である。資本の蓄積は、内面的必然性をもつて、資本主義をその一般的危機の中へ追ひ込ますにはおかなかつた。だが危機は、極度に尖鋭化するこゝとによつて、プロレタリアートにとつては、資本主義の鐵鎖からの解放の出發點となるものなのである。經濟的發展の全線に亘つての見事な概觀を與へてくれるのは、エンゲルスの「空想から科學へ」の第三章である。

五、政治的マルクス主義

政治的マルクス主義の頂點は、プロレタリア階級闘争と、その目標たるプロレタリア獨裁の樹立に、關する學說の中に、示されてゐる。

再びマルクスの「共産黨宣言」について見よう。マルクスは力をこめて、こう云つて

居る。「從來のすべての社會の歴史は、階級闘争の歴史である。自由人と奴隷、貴族と庶民、地主と農奴、親方と職人——簡単に云へば抑壓者と被抑壓者とは永久に相互に對抗する位置にあつて、或は公然の、或は隠然の、絶ゆることない闘争をつゞけこの闘争は全社會的建物の革命的再建築に終るか（ソヴェート同盟の社會主義社會の建設の如く、引用者加筆）或は相戦ふ階級の共倒れをもつて終るのを常とした。近代ブルジョア社會は（中略）古い階級の代りに新たな階級を、新たな抑壓の條件及び新たな闘争の形式をうち建てたにすぎない。（中略）社會はいよいよ益々二つの大なる、相反する陣營に相互に對立する大陣營に、ブルジョアとプロレタリアートの階級に分裂しつゝある」

これまである國家は、どの國家でも（アメリカ共和國にしる、日本帝國にしる）階級的矛盾の内部に發生したものである。即ち國家は「最も有力な經濟的に支配する階級の國家」であり、「この階級は國家權力の授けをかつて政治的に支配」し「被抑壓階級の隷屬と搾取の新しい手段を獲得するのである」

このことは、我々の毎日の經驗が苦々しくも一つ一つと實證して居ることである。日

本のブルジョア、地主的××制の國家は、彼等の收奪に反抗して立つプロレタリア、農民の闘争をどのやうな手段で鎮壓し、一握りの支配者の利益を守らうとしてゐるか？

「國家」の警察力は、女、子供も混るストライキ、争議に白テロを加へ、檢束、拷問、×殺を公然と行ふ。大衆行動が高まれば（米騒動の當時の如く）××の軍隊が銃を向けて我々大衆を襲撃する。

天の

日本の如き野蠻極るブルジョア地主的××制國家は治安維持法をはじめ、種々雑多な法律の網目をはり渡してプロレタリアートの前衛を×殺し封建的資本主義的二重の抑壓で大衆を半奴隷的無權利の狀態にしいたげてゐるのである。

マルクスは、階級闘争と斯の如く兇暴な階級支配はその根據である私有財産制と無統制な社會的生産が消滅しない限り、つゞくであらうと斷言した。プロレタリアートと一般勤勞階級の利害は、これらの根據がとりのぞかれることを要求する。勤勞階級は已むにやまれぬ力で解放のために闘はずには居れず、このプロレタリアートのブルジョアジに對する闘争は、必然にプロレタリアートによる政治的權力の奪取「プロレタリアートの獨裁」を目的とする政治闘争となることを、マルクスは八十年以上も前既に見透し

たのであつた。

ワイデマイヤー宛ての書簡の中で、一八五二年に、彼はかう説明してゐる、――

「現代社會の諸階級の存在にしろ、その相互間の闘争にしろ、それを發見した功績は私に歸するものではない。ブルジョア歴史家は私よりすつと以前にこの諸階級の闘争の史的発展を述べてゐたし、またブルジョア經濟學者らは、諸階級の經濟的解剖を試みてゐたのだ、私の新たにやつたことは次の事の論證である、即ち――一、諸階級の存在は専ら生産の一定の、歴史的発展の諸闘争と結合されてゐるといふこと、二、階級闘争は必然的にプロレタリアートの獨裁に導くといふこと、三、この獨裁そのものはたゞあらゆる階級の揚棄と階級なき社會とへ向つての移行をなすにすぎないといふこと。」

(レーニンの「國家と革命」からの引用、共產主義入門叢書、第十卷、三二頁)

マルクスとエンゲルスとが豫見してゐた資本主義の崩壊と社會主義社會の實現は既に一九一七年十月以來地球の六分の一に於ける資本主義の否定(ソヴェート同盟におけるプロレタリアートの獨裁)と共に始まつてゐる。

マルクスの理論が見とほしたものが、こゝでも亦、革命的實踐によつて我々の目前の事實として證明されたのである。現在に對する政治的マルクス主義の應用は、國際共產黨(コミンテルン)の綱領(一九二八年)がこれを豊富に示してゐる。

六、終りに臨んで

マルクス主義の研究は、第一には、マルクス、エンゲルス及びレーニンの、上を選び出されたやうな著作を読むことによつて完成されるであらう。その便宜のため、左に諸文献を一定の標準によつて分類して見よう。

第一の段階

エンゲルス著「空想より科學へ」

レーニン著「宗教について」

マルクス著「賃労働と資本」 勞賃、價格及び利潤

マルクス、エンゲルス著「共產黨宣言」

エンゲルス著「共產主義の諸原理」

レーニン著「國家と革命」

第二の段階

エンゲルス著「フオイエルバツハ論」

マルクス、エンゲルス著「史的唯物論について」

マルクス著「資本論」第一卷

レーニン著「帝國主義」「共産主義左翼の小兒病」

スターリン「レーニン主義の諸問題」

エンゲルス著「綱領批判」

マルクス著「フランスに於ける内亂」

第三の段階

レーニン著「唯物論と經驗批判論」

マルクス著「資本論」第二、第三卷 等。

其他マルクス、エンゲルス、レーニンの豊富な全著作がある。我々はこゝでなほ附け足しておきたい、——マルクスやエンゲルスの著書は一冊だけでも徹底的に且つ全面的

に理解されたならば、それは、マルクス・エンゲルスの色々様々な著作を澤山に、だが漫然と読み過したり、ペラ／＼頁をめくつただけよりも、すつと深く我々をマルクス主義の中へ導いてくれるものであると。讀書の際の几帳面すぎる位の眞面目さと徹底振りとは、マルクス・レーニン主義の研究に於いてこそ、第一の掟でなければならぬ。少く、だが良く讀め。

讀書そのものためには、我々は、サークルに於ける集團的研究をおすゝめしたい。かうした自習サークルのためには、「マルクス主義労働者教程」——例へば、既刊の經濟學や近代労働者運動史に關するもの如き——は、非常に適當な教材となるものである。

レーニン主義とは何か？

一、スターリンの定義

レーニン主義は我々の時代のマルクス主義である。スターリンはこのことについて次のやうに説明して居る。

「レーニン主義とは帝國主義とプロレタリア革命との時代に於けるマルクス主義である。よりくわしく言ふならば、——レーニン主義は一般的にはプロレタリア革命の理論及び戦術であり、特殊的にはプロレタリアートの獨裁の理論及び戦術である。」（スターリン「レーニン主義の諸問題」）

これらの言葉は先づレーニン主義がマルクス主義であることを明かにしてゐる。レーニン主義といふものはマルクス主義の何等の修正でもなければ何等の「補足」でもない。またマルクス主義をロシアでこねかへしたものでも「アジア的」な變種でもなくて、反

對にマルクスとエンゲルスとによつて基礎づけられた科學的理論の、一つの新しい時代の諸問題に相應して行はれた繼續的發展である。マルクス主義はマアいゝとしてレーニン主義はよりしくないといつて、マルクス主義の徹底的發展であるレーニン主義を拒否する官憲、御用役人、ダラ幹等は、きまつた様に次のことを持ち出す。即ち、發達のおくれてゐたロシアに於ける經濟的、政治的、勞働者運動の發展と進歩してゐた西ヨーロッパに於ける、經濟的、政治的、勞働者運動の發展との間には根本的な相違がある。まして、日本は國柄が違ふ。レーニン主義は役に立たぬ、と。さう云ふ連中は、帝政ロシアの特殊な事情の下で勝利をおさめることの出來た革命的組織や戦術も、ドイツやイギリスのやうに進歩した國々では役に立たないだらう、といふのである。まして、日本は萬世一系のXXをいたゞく「神國」で外國とは違ふからレーニン主義の組織や戦術は適用しないといふのだ。ドイツ、イギリス、アメリカを始め日本の資本家御用學者、ダラ幹などがこぞつて勞働者運動に對するレーニン主義を拒否するといふところ、逆にレーニン主義こそ今日のプロレタリアートにとつて強力な革命の武器であるといふ事實を物語るものである。彼等は搾取をつづけやうとして、次の前提から自分らの反動性を

合理化しようとしてゐるのである。彼等はレーニン主義は單にロシアの經驗だけの産物であると云ふ。此は斷じて正しくない。成程レーニン主義は先づロシア革命の諸經驗に基いてはゐる。然し生涯を革命家としての闘ひで貫いたレーニンは、國際労働者運動全體の根本的な問題の通曉者であつた。第二インターナショナルに於けるボルシェヴィキイ黨の代表者たる、また第三インターナショナルの創立者であり指導者である彼は斷えず理論的にも實踐的にもすべての國々に於ける労働者運動の諸問題に携つてゐたのである。レーニンがロシア人であつたからと云つて、レーニンの理論が特別にロシア的でないことは、マルクスの理論が生れ故郷のドイツ的でもなければ、革命的亡命者として住んでゐたイギリス的でもないのと全く同様である。

革命におけるロシアの諸經驗は、すべての國々のプロレタリア革命の理論と戦術との發展を助けるのに非常な役に立つものである。何となれば、特別な歴史的要因によつてロシアに於けるプロレタリア革命は、急速に種々の過程を経て他の諸國に於けるよりもより早く十月革命において成熟した。「産業上發達せる國はより發達のおくれたる國々に對して、それら自身の將來の像を示すに過ぎない……」と、マルクスは「資本論」の序

文の中で言つてゐる。帝國主義の發達とからみ合つてゐるところの獨特な事情になつて産業上おかれてゐたロシアが、プロレタリア階級闘争の立場から見ると現在では最も進んだ國になつたといふわけである。それ故に、實際に於いては、昔のおくれたロシアが革命十五年の今では、經濟的に進歩した國々に、それら自身の將來の像を示してゐるのである。

二、レーニンの帝國主義論

世界資本主義は、今日その發展の最後の段階である帝國主義に到達して居る。

レーニンは、帝國主義の特質について先づ、それが「獨占資本主義であり、第二に寄生的な若しくは腐朽した資本主義であり、第三に死滅しつつある資本主義である」とした。

レーニンが帝國主義をもつて「死滅しつつある資本主義」であると云ふのは、何故であらうか？ この時期において資本主義の種々の矛盾は極點にまで激化し、一步そこを踏み越えればプロレタリア革命に至るしかない瀬戸際まで切迫した破綻を世界の資本主

義が示してゐるからである。

帝國主義は、資本主義の特に重要な次の三つの矛盾を益々深めた。それについてスターリンは「レーニン主義の基礎」において左の様に證明してゐる。

第一の矛盾は労働と資本との對立である

帝國主義の時代において、一國の全産業は獨占的なトラストやシンヂケートに結合され、大銀行と結托し、幾百億の資本が一握りの金融資本家の手に獨占される。政治的支配権力は當然これら一握りの搾取者共の自由にまかされ（日本では××自身全財産の二十七分の一を獨占する大株主、大地主である）この権力との闘争なしには労働者階級は自身の些細な要求をも貫徹する事が出来ず、昔の様な勞資協調主義や、屈從的な經濟主義では晝休みの時間を十分間のばせといふ要求さへものにする事は出来ない。

帝國主義はプロレタリア大衆に抑壓と搾取からの唯一の清路は、資本主義そのものの根源を断つプロレタリア革命しかない事を日に明瞭にしつゝあるのである。

第二の矛盾、これは「資源と市場獲得の爲の闘争における各金融群、帝

國主義諸國家との對立である。

そして、此れこそ大衆の巨大な流血の上に行はれ 近代帝國主義戰爭の慘苦と罪惡の根源をなすものである。（目下滿蒙で行はれてゐる日本の中國再分割のための帝國主義略奪戰爭のジュネーヴアの國際聯盟退聲等、總べて、資源と市場獲得の爲に行はれつゝある闘争であり、帝國主義列強間の利害衝突の現實である）

だが、我々が注目しなければならぬ事はこのやうな列強の資本主義の利害衝突は、當然の結果として、闘争しあふ帝國主義國家の勢力を共に衰退させ（老大な軍事豫算其他によつて、帝國主義日本は今議會で二十二億と云ふ未曾有の軍事豫算を通過させた。）資本主義の地位の低下を招き、プロレタリア革命を速めるといふ事實である。

（帝國主義におけるかくの如き「戦争と革命」の第一の周期は、一九一四年—一九一八年、九年第一次帝國主義戦争と前後して起つた。戦争に依つて窮迫のドン底に追ひつめられた、ヨーロッパ諸國のプロレタリアートは驟起して「戦争を内亂へ」轉化せしめたドイツ、イタリー、ハンガリー、ロシヤ等に革命が起り、ヨーロッパにおける資本主義の最も弱い一環であり、ヨーロッパにおける最も經驗あり、強國に組織された革命的黨

を有するロシアにおいて遂にプロレタリア革命は成就した。(一九一七年十一月七日)
 今日には更に大規模な、國際的な、東洋をも包括する「戦争と革命との新しき周期」への移行の時期である。

第三の矛盾は、支配的地位に立つ小数の「文明」的國民と世界中の殖民地及屬國における數億の民族との對立である。(スターリン)

帝國主義は、殖民地、屬國(イギリスのインド、オーストラリア、其の他、アメリカのハワイ、キューバ其の他、日本の朝鮮、臺灣、南洋諸島、滿洲國)の大衆をあらゆる暴虐と偽瞞とをもつて搾取し、それらの殖民地、屬國から最大の利潤を搾り出す事なしに存立し得ない。巨大な利潤を得るためには先づ鐵道布設し(現在日本帝國主義が滿洲で熱中してゐる通り)工場を新設し、商工業中心地を設け野蠻な殖民地的抑壓を行ふ憲兵、軍隊を養ふ爲に、非常な投資をしなければならぬ。

同時に、こふ云ふ抑壓搾取を眼目とする殖民地政策は必然にあらゆる殖民地、屬國において革命運動を増大させる。今や、世界の殖民地、屬國の大衆は第一次帝國主義戦争當時の様に、資本主義地位を守るために大量的に殺戮される帝國主義豫備軍の役割を引

受けることは拒絶してゐる。將にプロレタリア革命達成の爲の幾億と云ふ常備軍として自身を變へつゝあるのである。ヘインドの民族革命、佛領インド、支那、アメリカの反亂、キューバの大衆的反抗、臺灣露社の英雄的奮起、朝鮮の絶間なき民族的反抗。レーニンは、これらの諸矛盾が過去に榮えた資本主義を今日では「滅びゆく」資本主義に變ぜしめた事を喝破した。即ちプロレタリアートに取つて「帝國主義は社會主義革命の前夜である」(レーニン帝國主義論)ことを明らかにしたのである。

三、プロレタリアートの獨裁

スターリンはレーニン主義の根本的な一要素としてプロレタリア革命の理論を取り上げてゐる。革命の理論の根柢は實に「國家」といふものについての理論である。「國家と革命」といふレーニンの著書の中では、マルクス主義的國家理論が日和見主義者共によつて行はれてゐるあらゆる歪曲から正しくされてゐるばかりでなく、同時に國家に關する十月革命の綱領が展開されてゐるのである。

「國家」に對する態度、これこそ實際に改良主義と革命的マルクス主義とを區別する

特徴であり、そして正に社會民主主義的理論家どもこそは第二インターナショナルの時期において、マルクス・エンゲルスの見解を厚がましくもアベコベのものに變へ労働者大衆の間に、プロレタリアの立場に立つての正しい「國家」についての考へが普及することを妨げたのである。改良主義者共は、マルクス・エンゲルスの見解を資本主義の手先となつて歪め一九一七年（ロシア）一九一八・一九年ドイツ其他の革命期に「民主主義か獨裁か」といふ欺りの「あれか」「これか」をつきつけることによつて労働者階級を迷はすことが出来たのである。

レーニンは資本家地主の國家からプロレタリア國家への移行は、革命とプロレタリアートの獨裁によつてのみ實現されるといふことを、搖がぬプロレタリアートの立場から示してゐる。

現存の資本家地主の國家を、部分的に改良したり、勞資提携したり、滑稽至極にも、「内閣更迭」したりすること、ひとりでプロレタリア國家、即ち社會主義實現のための要具に轉化させることが出来るなどといふことは斷じてあり得ない。

レーニンはマルクスのクーゲルマン宛て一八七一年四月十二日附の書簡を引用して

「……若しも君が拙著『ブリュメール十八日』の最後の章を読み返してくれらるならば、私がフランス革命の此の次の試みとして、最早や従來の如く官僚的、軍國主義的機關を一つの手から他の手へと移すことをではなく、反對にそれを破壊することを要求してゐることに、氣付かれるであらう」と。レーニンはこれに註釋を加へて云つてゐる。——「官僚的、軍國主義的機關の……破壊」といふことは、簡単に言ひ表はせば革命中のプロレタリアートの、國家に對する任務についての、マルクス主義の主要教義を含んでゐる」と。（國家と革命）

プロレタリア革命の眞の達成、社會主義の實現のためには一つの新しい國家が、即ちプロレタリアの國家が、（ソヴェート制度による）革命的大衆機關に基いて創建されねばならぬ。

レーニンは綿密な辯證法的分析によつて、プロレタリア革命の武器、ブルジョア階級に對する決定的勝利の武器としてプロレタリア獨裁がいかに必然な過程であるかを説明してゐる。

プロレタリアートが革命によつて權力を奪取したといふことは、まだ事の發端である

或國でプロレタリアート革命が成就したとしても、倒壊されたブルジョア地主の勢力は一朝にして根こそぎされるものではない。第一、一國でプロレタリア革命が遂行されすべての土地、私有財産は没收され、生産手段は社會化され、銀行、貿易は國有化されたとしても、國際資本主義の力はそれによつて部分的打撃をうけただけであり、その打撃によつて益々連帯をかためて、革命の行はれた國の内、舊搾取者階級と秘密に結合し、資本主義搾取を再興しようとする熱中するからである。(ソヴェート同盟に對する列強資本主義の種々様々な妨害干渉、反革命的陰謀がこの事實を語つてゐる。)

第二に、プロレタリア革命後も、事實上尙相當長い期間、舊搾取者が相當な利益を握つてゐるからである。貨幣その他の動産を持つて居るし、教養、専門的技術、役所の管理などの上で、熟練してゐるからである。そして、こういふ連中の或者がどんなに陰險に、プロレタリアートをうちまかし再び資本主義の社會へかへさうと企んでゐるかといふことは、ソヴェート同盟におけるドン・パス事件、産業黨事件でよく分る。

第三には、小規模な商品生産者が、革命の後も「資本主義とブルジョアジーとを産んでゐる」からである。

これらの舊搾取者の勢力と闘つて、プロレタリアートが奪取した權力を維持し、強固にし、無敵なものとするこの出来るのは、プロレタリアートの獨裁だけである。

プロレタリアートの獨裁は、資本主義から社會主義へ移行の際必ず通らなければならぬ歴史的時期なのである。

プロレタリアートの獨裁の時期は「舊社會の勢力と傳統とに對する或は流血的或は穩和の、暴力的の或は平和的の或は軍事的の、或は經濟的の、教育上の或は行政上の、頑強な闘争である」

プロレタリアートの獨裁は決して一日や二日で終るものではない。

プロレタリアートの獨裁は、完全な一つの「歴史的時期——内亂や國外の衝突、堅忍不拔な組織的活動と經濟的復興、進撃と退却、勝利と敗北をもつて織り込まれた全時期として見るべきである。」とスターリンは説明してゐる。「この歴史的時期は、共產主義社會建設のための經濟的、文化的前提條件を創り出すために必要なばかりでなく、更にプロレタリアートに、第一には彼等自身の訓練と教育とによつて、國の行政を司り得るだけの實力を養ひ、第二には小ブルジョア層をたゞ直し、教育し直して社會主義的生産

の組織を確保する可能性を與へるためにも必要なのである。」と。

そこで我々は明らかに知ることが出来る。プロレタリアートの獨裁の意義を理解し、承認することの出来ない者は、口先で何と云はうとも實際には、革命も社會主義社會の建設も否定するものである。

又、資本家地主の御用學者、政治家がプロレタリアートの獨裁といふことに對して、特にヤツキになつて吠えたてる理由も明白となる。何故なら、プロレタリアートの獨裁こそ、彼等少數搾取者による幾千萬の被搾取者の支配を根柢から絶滅する力をもつものであり、プロレタリアートの獨裁こそ、革命の成果を實らせ、社會主義社會を建設させ即ち、二度と再び抑壓者の地位に立てぬように、彼等を粉碎する力をもつからである。

共產主義は、階級の無い社會をつくらうと云ふくせに、プロレタリアートといふ一つの階級の獨裁を主張するのは誤りだなどといふ、彼等の狡猾な横槍に我々はこう答へる。プロレタリアートの獨裁こそは、階級の無い社會をつくるための條件を準備することを目的とし實踐するのである。と。階級の無い社會は、すべての生産、企業、文化が最も高い社會主義的發展を遂げた後に初めて現はれるのであり、そこへ到達する道として唯一つ、プロレタリアートの獨裁があるのみである。

ところで、このやうなプロレタリアート獨裁の期間において、眞に大衆を政治にひき込むプロレタリア民主主義の國家はどのやうに形成されるのであらうか。

「ソヴェエト」によつてである。ソヴェエトといふロシア語は委員會又は評議會といふ意味)

レーニンは「ソヴェエト」によつて初めてこれまで資本家地主の國家にあつては「實際」上ありとあらゆる手段や策略に依つて政治生活への參與からのけもの扱ひにされてゐた正にその大衆が、今や國家の民主主義的行政への不斷の、自由な、且つ決定的な參與をなし得たのである」ことを、ソヴェエト同盟における實際のやりかたで我々に示した

- ソヴェエト權力は、勤勞大衆をあらゆる壓迫と搾取とから解放する。
- ソヴェエト權力は搾取者に對する闘争において勞働者と貧農との結合、共働の舞臺である。

●ソヴェエト權力は、最も國際的なものである。
何故ならば、ソヴェエト權力こそ殖民地、屬國の大衆を解放し民族的壓迫を絶滅し、

民族の獨立を可能ならしめる。同時に一つの國家同盟への結合を促進させる。

ソヴェート權力は選舉區を生産單位の工場並に戰場（兵營）において、労働者を直接行政の機關に結びつけ、行政の方法を教へる。

レーニンとロシアの革命的大衆は、あらゆる日和見主義と飽くまでも闘ひ、徹底的にプロレタリアートの國家理論を貫徹したればこそ今日のソヴェート同盟の輝やかしい達成があるのだ。

附記「労働者農民の國家と、資本家地主の國家」(コップ十錢文庫第一輯)は、特に二つの國家の相異について、具體的に書かれたよい参考書である。

四、革命のレーニンの戰略・戰術

プロレタリアートの獨裁についての上述の説明によつても既に明らかであるやうに、プロレタリア階級闘争の現實は、そこに労働者と資本家だけしか居ないやうな、圖式主義なものではない。

反對に、レーニン主義の最大の功績の一つは、ヘゲモニーの理論、言ひ換へれば他のすべての被搾取人民層に對するプロレタリアートの指導的役割の理論である。これが人民革命に關する、プロレタリアートの同盟軍に關する、教義である。

革命の段階に應じて労働者階級の多數者を獲得するための、また革命を支持することの出来る他の階級からの總ての同盟軍を動員するための方法の案出、プロレタリアートの勝利を容易くする總ての豫備軍の吸引、と配置、これが革命のレーニンの戰略、戰術であり、プロレタリアートの革命的闘争を指導する科學である。

スターリンは革命の豫備軍を二種に分けて説明してゐる。

(一) 直接の豫備軍。

(イ) 農民階級及び自國の中間層（一般労働者、學生インテリゲンチア）

(ロ) 隣國のプロレタリアート（日本のプロレタリアートにとつてはソヴェート同盟及び中國のプロレタリアート）

(ハ) 殖民地、屬國の革命運動（朝鮮、臺灣、南洋諸島大衆の××制收奪に對する革命運動）

(ニ) 間接の豫備軍。

(イ) 自國の非プロレタリア階級間の対立と衝突。(日本においては五・一五事件等に現れた、金融ブルジョア間の利害衝突。反動及びダラ幹政黨間の絶間ないイガミ合ひ等) プロレタリアートはそれらの対立、衝突によつて生ずる社會的不安、動搖、幻滅を利用して、味方の豫備軍を擴大し、つよめることが出来る。

(ロ) ブルジョア國家間の対立、衝突及び帝國主義戦争。ロシアの十月革命當時(一九一七年) 烈強ブルジョアジーは互にヨーロッパ戦争をやつてゐたのでソヴェート權力をぶつつぶすために全勢力を集中するといふことは出来なかつた。これは、ソヴェート同盟のプロレタリアートによつて實に有利であつた。そして、今日のやうに列強帝國主義間の利害衝突は益々深刻となり、同時に國內大衆の窮乏化は覆ふべくもなく、二十二億の軍事豫算で失業者と窮乏農民を救へと叫んで立ち上つてゐるやうな時機には、プロレタリアートによつてこの種の豫備軍は極めて重大な意味をもつてゐる。

レーニン主義の戦略、戦術は、これらすべての直接、間接の豫備軍を、革命のそれぞれの段階において正しい闘争に動員し、例へばブルジョア革命がまだ日程に上つてゐる日本のやうな後れたる諸國では、プロレタリアートは、農民の全大衆を同盟軍として革

命的闘争に立ち、共通な目標、飢餓と、戦争と人民の政治的無權利に對して、闘ひ、労働者農民の政府樹立のための人民革命を行ひ、封建的支配權力を根こそぎに抜き去り、即時社會主義革命への移行を可能ならしめなければならぬことを教へてゐるのである。之で、多くの日和見主義者によつて繰返された一つの問題がある。それは一國のみにおける革命の勝利は可能か不可能かといふ問題である。レーニンは今日の情勢においては、一國に於ける勝利の可能性から出發し、すべての國における革命の發展、支持、激勵のために、一國において可能な、最善のことを實行しなければならぬことを力説した。

スターリンはこのことを裏づけて帝國主義の事情の下において資本主義諸國の發展は不均で飛躍的性質を帯びてゐること、例へば中國を見よ。戦争をひき起さずにはおかない帝國主義内部の破局的對立の發展、世界のあらゆる國々における革命運動の成長をあげ「すべてこれらの事實は一國におけるプロレタリアートの革命の可能性ばかりか、更にその必然性をも齎す」ものであるとして居る。

ソヴェート同盟は革命十五年の社會主義社會建設を達成し、世界のプロレタリア解放

の援助に備へてゐる。中國ソヴェート區域は日々に擴大しつゝある。殖民地、屬國の被搾取大衆の騷起。國際的プロレタリアートの黨の強大な組織等。すべては今日の革命的プロレタリアートにとつて有利であり、搾取階級を震撼させてゐる現實の力なのである。然し我々が眞面目にプロレタリアの解放を志し勝利を確保しようとするならば「革命を弄んではならぬ」資本家地主的××制の粉碎にしる、それは必ず一定の條件を具へた場合にのみ可能であることを知らなければならぬ。「下層」が最早古い方法によつて生活することを欲せず、又「上層」が古い方法によつては生活することが出来ない場合のみ革命は勝利を博し得るのである。「レーニン」は、別な云ひかたで其を裏づけて居る。「革命は全國民的な（被搾取者にも、搾取者にも等しく波及するところの）危機が存在せずしては不可能である」

而して、レーニンの指し示したこのやうな危機の徴候はすでに列國資本主義社會に現れ、國際資本主義の弱一環である日本資本主義につよく現れはじめてゐるのである。

五、レーニンの理論

プロレタリアートは、階級として社會に發生した最初からブルジョアジーの利害とは正反對の利害をもつて現れてゐる。プロレタリアートはブルジョアジーによつて生み出され、やがてブルジョアジーに對して闘ひ、それを粉碎し、社會主義の社會を建設する唯一の革命的階級である。

軍隊が戦争をする時、兵士の活動を、計劃し、組織し、指導し勝利へ導くものは、司令部である、プロレタリアートの謂はば戦争よりもつと長期に亘り、もつと複雑、困難であるブルジョアジーとの闘争を計劃し、指導するためには、最も科學的な、最も革命的理論と實踐とによつて鍛へられたプロレタリアートの總司令部プロレタリアートの黨がなければならぬ。

國際共産黨こそプロレタリアートの黨である。

ロシア革命の豊富深刻な勝利の歴史と、ドイツ革命の失敗の歴史とは黨についての巨大な教訓を我々に示して居る。「プロレタリアートを政權獲得のための闘争に導き得るだけの十分な果敢さを持ち、革命的環境の複雑な關係中にあつても正しい進路を誤まらぬだけの十分な經驗を具へ、更に目的への途上に横はるあらゆる障碍を巧みに避けるだ

けの十分な伸縮性をもつた」レーニン主義の共産黨が存在しない限り、帝國主義の打倒プロレタリアートの獨裁などは考へることも出来ないものである。

スターリンは「レーニン主義の基礎」といふ本の中で、レーニン主義のプロレタリア黨（共産黨）の本質と任務とを次のやうに説明してゐる。

第一に、黨は労働者階級の前衛であり、階級の一部であり、プロレタリアートの階級組織の最高形態である。

黨は、労働者階級の「前衛」でなければならぬ。このことは、黨が「労働者階級の精鋭彼等の経験、彼等の革命的な精神、プロレタリア問題のための彼等の無條件の犠牲的精神を兼ね具へなければならぬ」ことを意味する。そして、たゞ労働者階級が考へてゐること、悩んでゐることをとりあげて記録するのではなく（これだけは市役所でもやつてゐる！）黨はその革命的理論の武器、運動の法則、革命の法則に關する知識の武器をもつて工場、農村に根をおろし、労働階級のあらゆる日常的不満、革命的熱情を、プロレタリアートとしての階級的利害の水準にまで高め、眞に階級の一部として大衆を

闘争へ指導しつゝ、情勢に應じて前進し、敵の打撃から大衆を護り、幾百萬の大衆に、闘争における革命的科學性、勇氣、組織性、忍耐の精神等を鼓舞するこそ、プロレタリアートの黨なのである。

プロレタリアートが敵との闘争において勝利するためには、勿論黨の他にも労働組合、協同組合、工場組織、議會内の分派、黨の下に直接屬してゐない婦人の同盟、新聞、文化組織、青年組織、少年組織、種々の必要に應じてつくられる闘争同盟、代表者委員會その他様々なプロレタリアートの統一戦線の活動が絶対に必要である。しかしこのやうな種々様々の組織、及びそれら獨特の活動を全體として政治的に指導し、統一し、それらの活動を眞にプロレタリアートの解放のために有効ならしめるやうに方針を立てる中央組織は何であらう。そのやうな経験と必要な權威をもつ中央組織こそ黨なのである。プロレタリアートの黨（共産黨）は、黨の諸組織の鐵のやうな結合による總計であるばかりでなく、統一的な體系であり（上下の指導機關の存在。多數に對する少數の服従、すべての黨員の遵奉すべき實際的決議の徹底等）同時に、レーニンが云つたとほり黨はプロレタリアの階級的結合の最高形態なのである。

レーニンが、ロシア革命を指導し、プロレタリアートの獨裁を樹立した黨の貴重な經驗から斷乎として我々に教へて居る。

「今ではもう殆どすべての者が次のことを理解してゐる。即ち、我が黨に最も嚴格な眞に鐵の如き規律がなかつたならば、又労働者大衆、換言すればこの階級中の思想的な眞面目な、犠牲的精神に燃ゆる有力な、そして未發達の層を指導し、引率するだけの能力のあるすべての労働者が、黨を完全に飽くまで支持しなかつたならば、ボルシエヴィキは二箇年半は愚か、恐らく二ヶ月半の間も權力を維持することは出来なかつたであらうといふことである」

更に、プロレタリアートの黨は「分派の存在を許さぬ意志の統一體としての黨」である。

プロレタリアートの黨は、この社會の所謂不平分子の寄合所でもなければ、氣焰家たちの討論クラブでもない。プロレタリアートの黨は、プロレタリアートが不俱戴天の敵と闘ひ、勝利し、階級の獨裁を樹立し、社會主義社會を建設するためになくてはならぬ總司令部であり、精銳な武器である。

かくの如き黨の活動の基本となる鐵の規律も、意志の統一と全黨員の行動が無條件に完全に一致しなければ、不可能なのである。

この事についてブル新聞やダラ幹はよく惡意にみちた逆宣傳を行ふ。共產黨は幹部の絕對專制だ。指令一つ押しつけてあとは有無を云はせない、と。

ところが意志の統一や行動の眞の一致のためには、内部での討論を拒まないどころかそれなしには確乎たる信念や、自發的な服従が決してあり得ないとこそ、レーニンもその偉大な後繼者であるスターリンも力説してゐることに我々は注目しなければならぬ。規律は決して「盲目的」ではない。或一つのことについて、最も精密な、熱心な、遠慮のない討論がされなければならない。然し、その討論が終結し、批判がしつくされ、決議がされた後は、全黨員がそれを實踐するために飽くまでも一致し、決議の遂行を貫徹しなければならぬといふことなのである。

分派の存在を許さぬといふことは、このことから明らかにされる。プロレタリアートの黨として、階級の全利害の見地から討論し、決議した方針の實踐に際して、それに水をあつて敵と馴れ合つたり、その場その場の風向きに支配されて目前の損得に目がくらむ

やうな日和見主義の分派が存在を許される筈がない。プロレタリアートの黨におけるこの鐵の如き規律を少しでも弱めるものは、それが何人であらうと、事實上において、プロレタリアートに對抗してブルジョアジーを援助するものである」(レーニン)

國際共産黨が唯一のプロレタリアートの黨であるといふ所以は、それが、いつも眞にプロレタリアートの全利害を代表して闘ふからである。例へば一九一七年三月以後十月までのロシアで、當時政權を握つて居た社會革命黨(ダラ幹)連中は、資本家地主の利益のために、戦争熱を煽り、ヨーロッパ戦争の戦線へ勤勞大衆を猶もく送らうとした然し、ロシア共産黨(ボルシエヴィキー)は飽くまで戦争に反対し、平和とパンと土地とを與へろーと叫んで闘つた。これが、當時のロシアの全プロレタリアートの心からの要求であつたのだ。事實、兵士は塹壕の土袋に銃をさかさにつき立て、續々脱走して居た。戦争のために窮乏しきつた農民は、地主の館を襲撃しはじめて居た。兵營へ、戦争宣傳演説をしに出かけた社會革命黨の煽動家は、怒つた兵士達によつて満壇から引ずりおろされ袋叩きにされてゐた。戦争をやめろ！ 平和とパンと土地をよこせ！ この大衆的要求には婦人のきつい叫びが加はつてゐた。その全國的要求をとりあげ、支配

階級と闘ひ、プロレタリアートを勝利せしめたのは、ロシア共産黨である。

今日、世界資本主義の行きづまりを、大衆の犠牲と一層の收奪による戦争で打開しようとする日本の資本家地主的支配階級に對し、眞に勤勞大衆の利益を擁護しその先頭に立つて帝國主義戦争反對！ 土地を農民へ！ 失業をなくしろ！ ソヴェート同盟中國ソヴェートを守れ！と叫んで果敢に闘ふのは、ブルジョア地主の幫間である社會大衆黨ではない。日本の唯一のプロレタリアートの黨だけである。

プロレタリアートの黨が、プロレタリアートの解放の砦であるソヴェート同盟を守れ！といふ大衆の叫びを支持して立つ時、社會大衆黨は何と云ふか。闘ひの内容を狭くすりかへて資本家地主の側に立ち、口先だけで「日ソ不可侵條約を結べ！」と吹きたてて居る。野蠻きはまる現物收奪にあひ更に戦争と金貸しにしぼりつくされてゐる農民は今や各縣とも土地のために決死の闘争に立ちあがつてゐる。土地をよこせ！といふ切なる要求を胡魔化し、無意味な「請願運動」の行列に吹きかへてゐるのが、社會大衆黨である。大衆の飢餓と戦争の流血との元凶は、ブルジョア、地主的XX制である。一寸四方の土地に關する闘ひ、一錢の貨銀値上げの闘ひも、パンフレット一つよむ人民の自

由もこの権力による非道な白テロとの闘ひなしに行はれないのが今日の現状である。それにもかゝはらず、社会大衆黨は、大衆の憎惡の的をそらし「ファツシヨ粉碎闘争」といふ空のスローガンをかけ、さながら軍部だけが暴虐の源であるかのやうに思ひ込まさうとしてゐる。これこそ、プロレタリアートの最惡の敵社会ファシストの本性である。社会ファシストの惡辣な裏切り、暴虐をつくす支配階級の白テロ虐殺にもかゝはらずプロレタリアートの黨に對する眞面目な大衆の支持と参加とは、すべての資本主義國內で急速に、廣汎に高まつて來てゐる。

大衆は自身の困難な闘争の經驗から、誰が彼等を賣り、誰が彼等とともに生命をも惜まぬかを今や明白に身をもつて學びつゝあるのである。

レーニン主義による國際共產黨は、今日世界各國、殖民地、屬國にまでその支部をもち、凡そ三百萬人の果敢なプロレタリアートの前衛を組織してゐる。

日本のXXの警察は、三・一五、四・一六、一〇・三〇事件と前衛の白テロに熱狂してゐるが、今では僅か一人か二人の前衛を治安維持法にひっかけ、罪をでつちあげる爲に、數百人の労働者農民をひとつらへなければならぬ状態に立ち到つて居るのであ

る。レーニンは「あらゆる場合に、またあらゆる國において、共產主義は強固となり、生長してゆく。共產主義は極めて深くその根底を据えてゐる。あらゆる迫害も之を弱め衰へさせることは出來ない」ことを適切にも見とほした。

前衛及び革命的なプロレタリアート、農民に對する敵の白テロはいかに暴虐であらうとも、プロレタリアートこそ未來は我等のものであることを知つてゐる。資本家、地主的権力の狂氣のやうな襲撃について、レーニンは確信に満ちて云つた「ブルジョアジイは、歴史によつて没落の宣告を與へられたすべての階級が嘗てなしたと同じことをなしつゝあるのである」と。

萬國の労働者、團結せよ！

附。

レーニン主義を知るためには左の本がある。

スターリン著「レーニン主義の基礎」(白揚社八十錢)

庫文錢拾ブツコ

マルクス・レーニン主義
の
手
引

昭和八年四月二十日印刷
昭和八年四月二十五日發行

定 價 十 錢

編 者 日本プロレタリア文化聯盟

發行兼
印刷者 山 内 謙 吾

東京市神田區今川小路一ノ一(江戸ビル内)

發行所 日本プロレタリア文化聯盟

振替東京六〇六〇二番

レーニン著「何を爲すべきか」(岩波文庫四十錢)

「共産主義左翼小兒病」(希望閣)

「二つの戦術」

「國家と革命」

スクーリン著「レーニン主義の諸問題」

★労働者農民の手中で出版部を守れ★

取次所をつくれ！取次所へは出版物を三割乃至三割引で送る。規約送料二銭封入申込み

小林多喜二論文集

日和見主義に對する闘争

四六判 三百餘頁
定價七十錢送料四錢

内容
★★★ 右翼的偏向の諸問題、遺稿、わが方針書、四つの關心、プロ文學新段階への道、文學黨派性確立のために、文藝時評、日和見主義の新しい危険性、闘争の全面的展開の問題によせて、二つの問題について、組織活動と創作活動の辯證法等

コップ拾錢文庫 菊半截ルビ付六十餘頁定價十錢送料二錢

第一輯 労働者農民の國家と資本家地主の國家
第二輯 マルクス・レーニン主義の手引

小林多喜二全集（近刊）全七卷各五十錢 一部づゝでも前金で申込み！

定期刊行物			
プロレタリア文化	日本プロレタリア文化聯盟機關誌	定價二十五錢送料二錢	
大衆の友	すべての働く人のための雑誌	定價二十五錢送料二錢	
働く婦人	働く婦人のための雑誌	定價二十五錢送料二錢	
ウリトシム	朝鮮の人たちのために、諺文(新聞型)	定價三錢送料二錢	
コップ	新聞型のコップ機關紙	定價三錢送料二錢	

維持員募集！ 維持員には毎月雑誌を二冊づゝとニュースを送る維持費月額一圓

325
118

0920648

